

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第524号 平成25年4月8日

ヘイトスピーチ

スマートフォン用のアプリに「バカヤロー」というのがあるそうです。私は使っていないので分かりませんが、「会社で理不尽な思いをしても、なかなか文句は言えないもの。怒りを叫んで、会社のストレスをスッキリ解消しましょう！」というのがうたい文句で、これがじわじわと人気を呼んでいるそうです。

相手の許せないところはどこかについて幾つかの簡単な質問に答えるだけで、状況にあった怒りのフレーズが表示され、それをスマホに向かって叫べば、溜飲を下げる事が出来るという訳ですが、果たしてどうでしょうか。

スマホに向かって「バカヤロー」といえば溜飲が下がるというのであれば、職場や上司に対する不満はさしたることはないのかも知れません。

ところで、最近、韓国系の店舗が並ぶ東京・新大久保のコリアタウンなどで、一部市民団体が「朝鮮人を殺せ」などと書いたプラカードを掲げながらデモ行進を繰り返し、物議を呼んでいます。

「バカヤロー」というのはいささか品がありませんが、不満や怒りの捌け口としては可愛いものです。しかし、「朝鮮人を殺せ」とか「朝鮮人は日本から出て行け」などという主張は常軌を逸していますし、聞いていて不愉快な気分させられます。

こうした、特定の人や団体を公然と侮辱する発言を「ヘイトスピーチ」といいますが、昨年来、領土問題で日中、日韓の関係がぎくしゃくしてからは特に激しさを増しているようです。

中国や韓国国内の半日デモでも激しい言葉で日本を罵倒する「ヘイトスピーチ」が繰り返されていますので、お互い様かも知れませんが、中国や韓国国内の反日デモで、日本や日本人を貶める様な主張を聞くと、例えそれが一部の者の発言だろうと頭の中では分かっている、心穏やかではありません。逆に、中国人や韓国人が、日本国内のデモの様子をテレビなどで見たら、恐らく私と同じ感情を持つに違いありません。

「ヘイトスピーチ」を繰り返す人は、それで溜飲を下げているのかも知れませんが、中国人や韓国人と日本人が互いに相手を侮辱し、貶めあっている図は、情けないし非建設的です。また、こうした誹謗合戦は、いやでもエスカレートし過激になって行きますので、気を付けなければなりません。

ドイツやイギリスなどでは、人種差別禁止法などに基づき「ヘイトスピーチ」を処罰の対象としていますが、日本は全く規制されていません。

日本は、かつて言論統制が行われ、戦争へ突入していった苦い経験がありますので、「表現の自由」を束縛する事には慎重な立場を取る方が多いと思います。しかし、意図的に過激な表現を使って人間の尊厳を傷つけ、民族的な対立を煽る「ヘイトスピーチ」は、「表現の自由」の名の下に守るに値するものなのか疑問です。

識者には、「現行法の範囲内での規制」を主張する方がいますが、何が「ヘイトスピーチ」なのかという基準すらもない中で、彼らの行動を規制するという事は非常に難しいと思われます。その意味では、「日本も人種差別禁止法を整備し、ヘイトスピーチの処罰を議論すべきだ」という東京造形大学の前田教授のご意見（4月3日付北海道新聞）は、傾聴に値します。

なお、3月31日に行われた反韓デモの際には、そのデモ隊と同じ位の人々が「仲良くしようぜ」と書いたプラカードを掲げ反韓デモ隊に抗議した（4月3日付北海道新聞）との事ですが、日本人の良識はまだ廃れていないなと感じます。この事は、良識ある市民の力の輪が「ヘイトスピーチ」の抑止力として大きな力を発揮し得る事を、良く示しているのではないのでしょうか。（塾頭：吉田 洋一）